



重修真書太閤記

五編
七

大
分
館

~13
459
47



置とていあしぬへて塚口小神戸三
七信孝丹羽五郎左衛門尉長秀蜂谷兵庫頭蒲生忠
三郎高山右近と差置る毛間よ北畠信雄織田上
野及瀧川左近将監武藤宗右衛門尉等在番以倉橋
以池田勝三郎同勝九郎同古新父子三人原田小中
川瀬兵衛尉古田佐助刀祿山よ稻葉彦六郎氏家左
京亮安藤伊賀守郡山よ織田七兵衛尉信澄古池田
小塩川伯耆守加茂よ左中将信忠の手の者大矢田
以安部仁右衛門尉とて定めらとし
塚口の伊丹の西南よあふ一書よ三七惟任蜂
谷蒲生とあり毛間の伊丹の東南よあり一書よ

織田上野一人と載昆陽小瀧川賀茂峯小美濃
衆近江衆原田小古田左助茂川小織田七兵衛尉
高槻小大津傳市牧村七兵衛生駒市左衛門同三
吉湯淺甚助武田左吉茨木小福富平左衛門尉下石
彦右衛門尉野々村三十郎一屋よ高山右近矢田
小安部仁右衛門と籠置天正六年十一月廿四日
信長信忠二人とも帰京ありあふとあり
羽柴筑前守の播州よ歸り別所を取誥三木表へ勸
くべし惟任を丹州よ至り波多野と押之しと嚴重
小沙汰とあり十二月廿五日安土へ還御あり
其年も暮て天正七年とありけるよ秀吉の播州へ

引返し平山の陣であうて三木表へ打出小をう合
のこめて軍を川へ目立りとの事も無うし
あつて城中あても退屈や仕たうけん別所小三郎長
治諸將を集めて評定あしけるめ山城守やけるを
去年秀吉う為野口神吉志形の城を落さし
ら秀吉定めて當城へ寄來るあらんと待たうし
今以て責めらんともを平山陣を取て打守
う居ハ當城の兵糧の竭ると待とおのらとを然
ら城方あてを徒ふ籠り居て敵の計策ふ當らんも
六甲斐あうあへ然る謀を廻し合戦を仕掛
敵と打て頃日の眠と覺しゆへその術ハ五六百

人かあつて秀吉の陣へ押寄ちとあつて手
軽く引揚長屋表ふ伏勢を置て秀吉の兵川と渡う
て寄來らん時不意ふ起うて討取へとやけとの
侍大将の久米五郎忠勝をく出山州の計まことよ
よあり聞へゆとも夫ハ己を知て彼を知さる
處あり智謀ありさ秀吉いうて左やうの術よの
ふへさぞ忠勝うあめふ処ハ味方の勢と二手ふあ
し先手ハ秀吉ハ先鋒よめうて一戦をくむべ
し其塩合と見て二陣の兵を以て秀吉の本陣へ押
めつと奇と正とあし正と奇ふ變し循環端あく變
動常あく風の疾り如く電のさやく如く攻討ハ

如何いかにも神通自在しんつうざいざいの秀吉ひでゆきありては防禦ぼうえいの術すべも盡つくて迷惑まごころこそへし若わ又また先陣せんじん後陣こうじんの戦利せんりありては某敵陣たがひたがひもまさき
と入い秀吉ひでゆきと差違さちがひて死しとへさあう敵たがひも敵たがひふもさう
尋常よつひの策さくよては勝利しょうりあるまじくゆとゆと中なげと満まん
座ざ此義このぎも同どうしけり

一書いっしょふ此評定このひやうじやう天正六年二月十日早天はやあまの事こととい
つう山城守やましろのかみの十一日辰刻うしひつひ城中じやうちゆうで打出長屋表あひだふ
伏兵ふくへいを置室田保隅岡村等おきむろたへぐみおかむらなど若武者わくむしや五六百足輕あひだ
少々添すくあしある川がはを渡わた敵たがひと呼引よびひき然しかに敵野口たがひののくち
神吉かみよしかの勝軍かちぐんも効あて川がはを渡わた追來おそるへし其時そのとき伏ふ
兵へいを起おこし前後ぜんごより引包ひきかてあしと討うちへしと云いふ

久米五郎志水彌四郎くみごろうしすい や しやうしやういやく川がはを渡わたしたる方かたの
利りを得えしたためあし某たがひう愚案ぐあんの勢いきほを二川ふたがはより引
分わ一手ひとての城州じやうしゆうを大将たいしやうとあし秀吉ひでゆきの先手さきまてもあ
うとあへ二陣ふたじんの小八郎殿おやちやうどので大将たいしやうとあし秀吉ひでゆきの
本陣ほんじんへあし味方あじかた打負うちまけあし我々われわれ兩人敵陣ふたにんたがひじん
へ糸いとと入い秀吉ひでゆきと組くみて勝負しょうぶとへしと計はからひしめ
い四座しざ斯義このぎも同どうしけりといあり
然者しかるもの明日あした早天はやあまも押寄おしよへし先陣せんじんの大将たいしやうより別所山べつしやま
城守じやうしゆう賀棟がとう相從あひまふ諸士しよしも別所左近べつしやさこん小野權左衛門おののりけんざゑもん
櫛橋くしはし弥や五ご三さん足あ輕かろ大将たいしやうも保隅越中守たへぐみえちゆうしゆう室田内匠むろたにやう岡おか
村むら因幡守いんぱんのかみ高橋源太左衛門たかはしげんたざゑもん神保民部かみたもみんべ少輔せうぶ大村九郎おほむらなな

大岡日記二編卷一七

左衛門尉加古右京亮小寺若狹守黒田右衛門尉廣
岡藤九郎矢田太郎左衛門と始士七十二人雜兵合
とて二千五百餘人也二陣の大將ハ別所小八郎治
定同甚大夫光枝小大郎同道碩足輕大将ある久米
五郎忠勝志水弥四郎直近との外服部五郎左衛門
尉後藤又左衛門尉糟谷玄蕃助垂井武藏守有田兵
庫頭端山左馬助永則魚住以下六十三人雜兵多く
てらあゝあうぬへゝとて逞兵都合七百餘騎二月
十一日の早天ふ三木の城を出川を渡り長谷表ふ
おゝ寄敵陣平山ふ對して備を立る羽柴の軍勢ふ
とを見て即時に打出掛合んととると秀吉制して

いらく敵の体を見あゝ先陣ハ二千四五百とある
後陣ハ六七百ふも過一是を奇正虚實變
此の陣法ふと先勢味方の先手ふゆゑ有無の合
戦と持と見と二の身の兵ハ究竟の者計を擇と山
の腰と廻り我旗本ふ突入んと軍法あり我此敵
と微塵ふあをへと策あり諸士分外の勇を振ふて
働うら良士多くうち取へ今押來る敵ハ皆是城
中よて名譽の輩あり是を打破うある城中の勇氣
大形の滅ふへ敵の謀畧我推量ふ違ふり味方
の備と立べとて先手の兵士三千餘人を二手ふ
分加藤孫六中村孫平次堀尾茂助峰須賀小六四

人と先手とありしとい敵に向く手痛く合戦を
平野權平一柳市助大谷吉隆三人の身又
そありて一寄手我先手と戦鬪あるる我旗本
て合圖の旗を閃く時急小取て返一旗本へめ
り敵の後を断切べしと下知し叔子青木勘兵
衛尉木下弥助藤井又太郎神子田半右衛門尉等二
千餘騎の味方の先手と敵の先陣と戦ひ味方の後
勢引返る時定めて急小切崩さんと掛あべいとい
其時横合より進て先手を援け敵のうらうら廻ら
んとする氣勢を為べし然らば敵自然と此方へ向
て働くべし叔子旗本より秀吉の弟小一郎秀長

と大將とく加藤虎之助福島市松片桐助作藤堂
與右衛門尉増田仁右衛門尉等一千人を真先と備
へさ下知し應しと戦ふべしと軍の進退を定め
秀吉自身采配を取て小高と処と掛上り床几み腰
うちうけく待居り三木方の諸勢平山近く進て
備と立定めて羽柴の兵とも去年野口神吉志方の
勝軍小習ひ急と打出しと思ふ一人を陣を出
て戦を挑むのあり先鋒小進り別所山城守賀
棟二千五百餘人と一手ある勢猛く攻めし鉄
炮を打掛く近々と押寄し羽柴の先勢加藤孫六
中村孫平次堀尾茂助蜂須賀小六等一千五百餘騎

みて突て出てふとを防く其後より大谷吉隆平野
 權平一柳市助等同く一千五百餘騎よて續き
 う雙方鎗を取て一往一來火花を散して戦ひ闌々
 ありける頃三木方二の身の七百餘騎馬と進めて
 馳めける先手み入替るめと見どいさの無て暴
 小横切東の山越え岨を傳ふて真一文字小秀吉の
 本陣よ突めり子旗本備の輩敵の嶮岨よあるうち
 進て戦らんよ云を筑前守あらしめ敵難所を越來
 てつうと川らんよ爰まで引付待て開て戦つと下
 知ふける処へ別所小八郎治定り兵七百餘騎の
 の坂道の嶮いさともめつと進て來るむとの

勇士あとい少もためらば本陣よ打入んとする
 所を秀吉立あうと采配を取るとめとと下知と
 とい小市郎秀長自身鎗を取て真先よ進て會釈を
 るく一番鎗と名乗三木勢の中野大八郎と突ふを
 をとい郎等樋口太郎走寄て首を取秀長よとく進
 んて勢猛く振舞い加藤虎之助福島市松片桐助作
 いつとも血氣さうんの壯者ともあたらしめけし
 と切立突立責付ふ三木方の大将小八郎治定若年
 られとも名譽の勇士さう手勢ととげすし真先よ
 進んで戦つと久米五郎忠勝志水弥四郎直近おめて
 急あらし續たう二人とも大勇不敵の剛のいのか

うその上此軍を勧めしものあはれ必死ふるう一
足も引しこめをさけう雙方名を惜し義を重し我
身の大事と戦ひける処は筑前守旗印を取てあを
ひらめかきとら羽柴う手の二陣の勢大谷吉隆一柳市
助平野權平一千五百餘騎旋風の如く一度は動と
寄來り別所小八郎う七百餘騎を中し取籠あまさ
しもの突立といさしめは猛さ三木勢前より加
藤福島等の勇士獅子奮迅の怒をあらと攻めると
後より平野大谷一柳潮のさく如く大浪のうを
あへる如く責攻く戦ふると三木勢散々ふ打ふ
さし討死手負その数しらすを大将小八郎治定立

あがうあぐてい惣勢討まへしとおのひ士卒ふ下
知して百餘人一所に集うあめて用意の鉄炮らう
とらと放ちうけさうあを羽柴勢こしと打立ら
しとさうあうけて見へける隙は三木勢くう引ふ
退うんとは扱まる先陣の別所山城守敵方二の身
の兵の引退く処を突崩さんとあしける処は秀吉
乃旗本脇備青木木下藤井神子田二千餘人横合ふ
う押あは別所う勢のうらうへ廻らんとは前ふ
さし加藤孫六嘉明中村孫平次一氏蜂須賀小六堀
尾茂助等のよく勇威をあらうし真しうは突立
げし別所う兵とも後を断切してら叶ふまうと

二の足を踏心よりおの川うら色めさ立て見つけ
ふと羽柴う兵三千五百餘騎一手ありて戦つた
三木勢大半討と一町あまうあうらう立らと隊伍と
だせて整とむ山城守自身鎗を取て扣たてて
めうめうてい小八郎う手危ふるるべし所詮勝
つと軍あうは早く勢を引上んと小高と岡とを
上う味方を集め退うんととるふ羽柴の兵士先鋒
と旗本勢と一手あり五千餘人をとまあう追來
つと程ふたやとく引取めとく爰て三木勢多く
討とく久米五郎忠勝志水弥四郎直近兩人の
ゆと必死の覺悟あとい互うや合とあとい評定の

席にて中より詞をとりと袖印を引らさう兜と
脱て髪と亂し刀の鋒ふ首二川突つとぬさ羽柴う
兵士と約と秀吉の旗本へ忍入向ふと見と筑前
守床几とあうと諸卒と下知して居さうけう久米
五郎あそれと塩合うかと小躍うして寄ける
そのあさひ五六間らうらにありし時貫さたる首
と取て投出し血刀と打振く秀吉と飛めと大谷
吉隆とるめと見付韋駄天の如くらうと來う中を
隔てと切合たう志水弥四郎の既と討とつと
五郎のいまと手も負はと大谷と火水ふありて戦ひ
けるか薄手三ヶ処うけとと太刀を投とて大谷と

むつと組くみて揉合もみあたりされとも五郎ごろうの今朝けさより數刻いくわきの軍いぐさも氣疲いきつかと勢屈いきまひし終ついに吉隆きくわんも組くみ伏ふらど刻いくわき返かへさんとあしげとも吉隆きくわん緩ゆるさし首くびを取とて立上たてあり山城守やましろのし小八郎せいはちろう討うち残のこされ勢せきと收あめて引返ひきかへさんとあしげる処ところと秀吉ひでよし稠敷ちうぢき追おひつけしめら三木みやき勢せき既すでにみこととく討うちへううけるよ小八郎せいはちろう治定ちじやうぢやう只ただ一騎ひとばし引返ひきかへし追來おひききる敵てきを防まりけるよとて山田やまだの一黨ひとあひ衣笠えがさ某この峯みね本もと金左衛門かねざゑもん尉ゑい中嶋なかつしま藏人ぞうじん魚住いそぞう市山いちやま下勘解由げかんとく中嶋なかつしま民部たみべ少輔せうぶ松本まつもと又また市竹いちたけ下金げかね五郎ごろう同どうく引返ひきかへし治定ちじやうぢやうと援たすけて戦いくへる總軍そうぐん一度ひとたびより返かへさんと馳かげると治定ちじやうぢやう大音おほねあけ某このう爰こゝにて戦いくあひまに諸軍しよぐん

と引揚ひきあげると下知げちしげると羽柴はしの兵士へいし大將たしやうありと見てみてげるといふものたたく込入こみいりて戦いくふると治定ちじやうぢやうも終ついに討うちて首くびと秀長ひでながの郎等らうどう樋口ひぐち太郎たろうよとてとげう此こゝといふら山城守やましろのしのつめよ五百いほひとてうみ打うちあると漸ゆる三木みやきへ引返ひきかへしけう城方じやうがたの士し三十五人さんじゅうごにん雜兵ざつへい七百八十餘人しちひゃくはちじゅうよにん討うち死ししげると別所べつしょ方がたの大おほ小弱せうじやくく再度またたび打うちていせんともと筑前守ちくぜんしの比勢ひせいあさ勝利しやうりと得えるうけう一書ひととみみ久米くみ五郎ごろうと討うちへ福田ふくだ孫まご八郎はちろう貞成さだなりとあう三木みやき勢せきのうちあて上月宮内うづつきみやうない少輔せうぶ高橋たかはし弥や五左衛門ござゑもん衛門尉ゑもんゑい神澤かみさわ又また市上いちがみ原越はらご中守なかつし同孫どうまご允のり櫛田くしだ傳藏でんぞう飯い

尾長吉同吉左衛門藤田宗六依藤某より軍と

と云
秀長丹生山の砦と乗取事

并淡川彈正城を開退事

荒木村重謀叛に依て三木の別所と牒し合とん
るめ荒木方の端城兵庫花隈に續て攝州丹生山に
砦と築る三木より勢と込置近郷の一揆等と差加
へ二千餘人ふてあしと守る抑此丹生山と云ハ攝
州第一の要害ありて峯嶮く谷深く鳥あらず常
に通ふのめをあり然ハ先達て毛利より助送りし
兵糧と此處に入置別処に侍は三宅與平次治高

橋平左衛門と大将とあり侍三百餘騎ありてあしと
守らと荒木より方へ合力とありと約束と又此丹生
山の砦の近隣淡河の城に淡河彈正と云のの五百
餘騎とて籠城と秀吉謀と廻ら丹生山の砦を取ら荒木
と三木との通路を断切の上兵糧ありて奪取し味
方十分の得あり是と攻援んとありて如形堅固の
切処あり容易に攻入りし如何と云と工夫ありける
急度思案し忍び馴し兵士六十餘人を擇出し又雑兵
五十餘人紙旗松明あしと持と二月廿六日の夜半より
小雨の降けるともいとし丹生山へかのわくと忍の兵
士の城に入りて火を掛し雑兵等ハ山の半腹に紙旗を立置

城中火の手あがり松明を燃し付了と約束し小市郎秀
長へ三千餘騎を麓陣と取山上の火の手を見攻上るへ
こ定めけるふ忍の六十餘人さうのみ嶮く山坂を越堀際
至り城中を伺ふ如法深夜のこていあり要害のこを頼
み帯ひろとけし眠るにけり堀を乗越六十餘人忍入
役所へ火をあげると一時は焼上る半腹は扣へ者も
約束たぐは松明をのりたるを見て秀長の三千餘騎お
あゝ関と作て攻上る城中よていありのひも寄ぬるといひ
六十餘人うを散て鯨波を作り火とてあつむと敵味方
の差別も見分らぬ三宅高橋をく逃道を求めて落失し
うの羽柴秀長一戦も及らぬ砦を乗取兵糧あまを棄取

平山の陣へ運るを尔後秀長この競ふ淡川の城を攻取んと
あけるふ城主淡河彈正丹生山の落へ後必定敵のゆるか
らんと思ひしうバ二百餘人を勝りて敵の寄へ道筋左右に
伏置我身の百餘騎を率ひ道の掃除する体あてふこ
あうこの堀切菱と時て足のくこあて居たりしと秀
長う斥候の兵士望見て走廻り淡川の兵士へ道の掃除を
いせしこの合戦の用意とい見へはと告げるとうのこ
らあり寄て打散し其勢よつとて城を付入よさんとこ
やうつ寄りの淡川彈正う百餘騎あてありあて叶
その散亂とると秀長の兵士勝り乗て追うけける堀切
の菱は足を痛めて進めぬる処への伏兵左右より二百

餘騎つゝ鉄炮を打ちけく攻立りぬ秀長の先鋒散々
み打をくめらして進み得ど淡河彈正定則静々と廿餘
人と討取て人数を引上城中へ引入り敵の大勢あり二
度目の軍の大事ありあつ爰して防戦その詮ありとて
三木の城中へ引退さげりふより秀長戦をひきて淡河
の城を乗取此より筑前守へ注進
一書よ淡河彈正陰馬一足を鳥目三百文ふ募りて五
六十足集め秀長より五百餘騎の中へちあち手と扣て追
立りぬ秀長の先鋒大に散亂をりよと注を

重修真書太閤記五編卷之十九

重修真書太閤記五編卷之二拾

三木勢羽柴の砦と攻る事

并羽柴秀吉丹州責と論る事

羽柴筑前守秀吉三木表平山の陣ありて別所山
城守同小八郎及ひ城中名譽の勇士等の打出しを
迎へ戦ふて大に打勝大将小八郎治定をりぬ宗
徒の侍多く打取をれし續て摂州丹生山の砦を攻
拔兵糧ありて分捕し淡河の城と追却し三木あり
兵庫花隈の通路を断げりよと荒木別所の等難義
み及ひ羽柴の軍威ありて熾盛み成りけり然りと

三木城中兵糧多ゆゆ福の毛利家へ兵糧を請ひける
ふ輝元兵糧三百餘艘を送るへと小早川吉川の
人々相談し船手は馬を飼ふ兒玉内藏大夫浦兵部丞
宗勝を奉行とて播州灘を馳明石魚住の沖に漕
あへべ三木城を見継んと羽柴筑前守ゆゆ角
あへんと察し三木と魚住の間を取切らんゆゆたゆ
方々ふ三十餘處の附城を構へ溝を堀役所を掛亂
杭逆茂木丈夫ゆゆらへ敵の通路を斷切て是と
守らとてゆゆ三木城中大に困窮し如何ゆゆもあて
兵糧を迎取んと別処山城守賀棟同甚大夫加古左
京亮梶原平三兵衛魚住隼人那波左近將監垂井民

部櫛橋五郎次郎等数人を率いて打て出羽柴方の
若し神子田半左衛門尉古田吉右衛門尉中西弥五
作等守り居たりし處へ押寄短兵急よ攻立たり
此若し兵士ゆゆら五百餘騎ゆゆらにて籠り
しゆゆ三木方の大軍ゆゆ攻立らると既よ責落され
ゆゆ見ゆゆゆゆ知ゆゆ神子田半左衛門尉五百餘人
を一手ゆゆあゆ木戸を開て切て出表ゆゆゆゆ多勢
か中へ叫喚て駈入從横十文字よ突て廻る三木勢
是とて敵ハ小勢あるゆゆ中よ取籠一人も漏さゆ
打取んとひゆゆゆゆ去とも羽柴方ゆゆゆゆも神
子田よ劣らぬ勇士ゆゆゆゆ事ともゆゆ四角八面ゆ

切て回る三木勢散々突立らとける処は誰と
知は三木勢の中より打出とて鉄炮は古田吉右衛門
尉洞のあつと打抜と馬上又た平より兼真逆様
落けると三木方より垂井民部より寄て首と取
古田討とて見て神子田中西う勢大と周章敗
走とんとせし処へ近隣の砦又あつける中村孫平
次蜂須賀小六平野權平何も二百騎三百騎引率し
て追々馳來り横槍を入けるあぞ神子田中西力
と得て色を直し勇と進んで駈しつゝ三木方大
狼狽しけると新手の羽柴勢得たりと踏込突立
筑前守此由を聞て馬廻の勇士加藤虎之助同孫六

福嶋市松片桐助作等一千餘騎を引率し三木勢の
後より會釋もあつて打てあつて散々と掛りける
別所方の兵士不意をうけて仰天し右往左往と
敗軍を大將山城守うけて砦を乗取つて早く
人数を引揚るやとあつて味方とさし招き一処に
集めんとする羽柴う兵士三方より取巻搦立け
ふあつて三木勢うこれの数を知ると今は是追
也是よて死や者共と呼らり狂ひ廻りて働さけ
ふ中あも垂井民部は古田吉左衛門尉う首と取
即等と為持居たりけると加藤虎之助のつとて
味方の首あり渡をよと呼らり駈向ひけるは民

部渡をすし中を隔てけるふり虎之助面倒あ
 うといひさし槍を取て垂井と突うし即等ふあ
 の首取返をと呼られ木村又藏のこすうと應
 てすし寄垂井り即等林新吾り持たる古田の首
 を奪ひ取りつと争ふ林を取て引伏首めさ
 切古田り首と取添を帰る垂井民部南無三寶と
 驚さふりめくふ処を虎之助付入て一鍵と突ふを
 けい又藏り寄て首を取筑前守此こと聞て
 虎之助主従の働抜郡ありと称とらるめく三木
 勢散々敗走しけい那波左近魚住隼人櫛橋五
 郎次郎等大將山城守を退しめんと面々踏とらま

うて討死しけるその隙ふ山城守残兵をゆい具し
 て漸三木へ引入たり羽柴方よても今日の戦大利
 と得しめ長追をべうと下知して人数を引
 揚とめ悦ふと限あり三木よて討出ること
 よ侍多と討死し刺兵糧運送の道も開けを困窮ま
 ことばをこふしと聞えしめとも毛利の加勢
 者寄ることもめあしめしめと沖とめしめ
 見合らんあし今いふとへさ様ありさらの一先本
 國ふ引返しすを援くる使宜もあえりきとて
 いつとも船を乗戻しけり筑前守らとらの由と注
 進有しうの織田殿あさうに秀吉の軍功を賞をら

と又々加勢を下さるべしと三位中将信忠を大将
とあり織田七兵衛信澄堀久太郎秀政並に越前衆
前田又左衛門尉佐々内藏助原彦二郎金森五郎八
不破河内守以下多勢を率して四月十二日摂州へ
下向あり

一書小魚任ハ三木より四里を隔つあり小藏を
作り並へ毛利より兵糧澤山入置時分を計らひ
三木へ運送せんと議しけるを秀吉聞付三木魚
任の間君う峯をとりめ卅餘ヶ処付城と梅置し
う天正七年九月九日三木より案内を出し兵糧
を納給せりゆへと約束し十日の夜高砂より加

東の室山へ付て三木へ入んとて平田の付
城小籠より谷大膳打出戦ひ敵大勢を撃て大膳
自殺し三木方魚任五左衛門尉と脇坂甚内安治
が為み討りとあり

羽柴筑前守秀吉是を悦び三木間近く誥寄陣を取
猛威を振ひけりとも前々の如き懲て打出るこ
あきたる城を堅固に守り居たりけり三位中将味
方の軍勢の盛あるを小乗し急を責めしるありと有
けるを筑前守堅く制し城兵を多く打出敗軍しよ
るもの多く討ててゆへ共猶多勢ありてゆへも
忠義をくして長治と共に死を致さんとありしを

のふしハ此を攻るともたやとく落るとあるまじく
くその上ハ要害より其の味方をお早に損とせし
爰にて士卒と損しあら後日毛利家と對陣さんと
事關へ「唯城兵と恐怖り」あら程よく自滅仕
ふへ「毛利も四國九州と取合隙あけし」後詰急
ふ埒明まし左と右の爰許のまじ機遣る「但丹州
ハ惟任光秀請取の國又ゆへとも吉川小早川作州
へ働さし席但州を経て西丹波へ亂入さば車大變
ふ及ひゆへ「檢使一人仰付らば」播州も
某西丹波へ責入波多野赤井等を追落しやべとやけ
みより三位中将尤と同意ありて同月廿八日播州

と立とらんと撰州ふ入古池田不到著まじゆ織田
殿ハ對面の時具又筑前守のやと「趣を言上あり
けし」織田殿間食此義尤ありと宣ひ中将殿も
攝播数日勞煩休息のため歸路ある「と仰らせ
し」そのまじよう上洛ありて直に岐阜へ還入あり
しそのまじ織田上野入筒井順慶堀久太郎と檢
使とあしと佐々蜂谷蒲生不破築田の面々「つら
敷と出せし」由を御下知ありて五月四日此勢播
州へ下向し攝州能勢口三田口より丹州へ手遣を
「し」丹羽五郎左衛門尉池田勝三郎塩川伯耆
守中川瀬兵衛尉高山右近將監以下光秀ふ合力し

て東丹波と制をへしと定めらる

攝州能勢郡妙見山より丹波栗田郡へ入杓子峠より

多紀郡へ入へしより攝州有馬郡三田より天王峠と

経て多紀郡小枕へ入駒丸峠より多紀郡小津立杭へ入へし

中あも高山右近將監中川瀬兵衛尉等荒木村重

のため織田殿へ參上し連々村重を宥むととも

村重とひ一族從類勿々同心を以て却て織田家の

砦へ度々仕うげ小攻合し少くも屈して中川高

山今更面目を失ひさうとて織田殿へ背うんとも

流石よて誠の味方とありあけり

羽柴秀吉西丹波を征する事

并惟任東丹波働きの事

播州より羽柴筑前守秀吉西丹波へ亂入をんとお

ゆへとも三木表を打明て丹波へ越んを心元あけ

まの舎弟小市郎秀長を大將とあし肥坂甚内安治

中村孫平次一氏糟谷助左衛門尉加藤孫六等とを

へく二千餘人その外丹波但馬播磨の降人等松田

攝津守大田垣但馬守小野木雅樂頭出石源右衛

門尉秋原七郎左衛門尉谷出羽守長井四郎左衛門

尉櫛橋左京亮神吉藤八郎等を案内者として惣軍

三千八百餘人檢使到着あし即刻發足せんと侍

又程よく織田上野人筒井順慶堀久太郎秀政等著陣しけし秀長時目をうつさぬ西丹波へ入るを然るに波多野主殿頭宗長の旗下長澤内記久下弥五郎等國境に出勢し支え防くといへとも秀長猛威をふるひ攻立けし久下長澤忽ちふ打破らんと兩人とを踏止うて討死を秀長手とりめの軍み打勝て大に悦ひその勢破竹のこく國中へ責入綾部の城をのう破らんためよりの城へ押寄るあくに波多野主殿頭宗長の嫡子美作守宗貞血氣さめんの勇士ふしの敵寄來の速に駈向ひ追散さんかのとと逞兵二千餘騎を率し打て出て陣を取寄手

を正面より受戦を挑まんを待うけし秀長あのを由聞より透間をあく押寄たりしめを波多野美作守宗貞敵の寄りと待ととくおのひしよ峠とをを下り羽柴の先陣へ大山の崩さるとく真一文字と突て入命とめさう死狂ひよあうて戦へる案内とて真先み進らし小野木雅樂頭大田垣但馬守神吉藤八郎たちも突立らんと四度路にありて追却らる波多野宗貞をいめしと馬の首をならくして駈けし小野木大田垣神吉三人とも命の義み因て輕踏らるる一足をひくかひうしと勇めあひ鋒より火を出しと戦ひける波多野勢み

取めとすれ終み三人討とけり宗貞いよく勝みの
う寄手の二陣へ突うく是と駈破らんと進む処
へ筑前守の旗本もこの名を得し加藤孫六脇
坂甚内糟谷助左衛門尉蜂須賀小六との外究竟の
者とも轡とありへ勝又乘らる波多野勢をこころ
を恐とをこころとあめいて打てめく右又あふり
左と拂ひ駈立うけ立あけりあふり波多野り勢
心いたげいとゆへとも先刻より度々の戦ふ疲と
し上てあふり荒手の勇士みわけあやまると何り
り以てたするとも暫時又数十人討と手負すも多
げと便宜又つとて敗走び秀長めくと見ると

を敵の色めと立ちとあふりとめめや者共引てを誰
よ面を合とつとどめとやうくとと勇めとつと
加藤孫六脇坂甚内蜂須賀小六糟谷助左衛門尉中
村孫平次いよく力を得て透間あふり追立あふ
たて突あをさうあせ働さげと宗貞も亂軍のう
ちみ討とつと見へ川ととも爰とて討死その詮あ
あべうとつと一まの引て又あを戦とめと引返とを
勝めとつとる勇士のうとまると追掛しつとも日
夕陽あふりむとぬれ案内知ぬ土地の夜合戦心
のとあふりとと大将あふりを止めあふり明日あを城
を取へげとそれと彼等とゆるととと荒言

して人数を引揚其夜の野陣をらうして終夜焼灼
 げたる篝火の影をましく勢を示しあらと天正
 七年五月九日早天ふ八幡山の麓に押寄関を作り
 鉄炮を打ちけく人数をくむと城の大將美作
 守宗貞打出て又一合戦とあゆへとも寄手の次第
 勢のさるる荒手の人数加らうとあつる
 味方の昨日の軍つうと其上ふ手疵三ヶ處負ぬ
 ののをあげて勿く此勢をうりよて籠城をんを
 無益あるべし切出て敵を追へる氣力あくた落
 支度のことと見へる宗貞斯て防戦を
 のかろ氷上へ馳入て敵を防くへとて引入を

けれは秀長直にお寄りと攻んとあつる
 とも波多野数代の思とあつる國人も多
 て一朝一夕のこととあつるゆゑとあつる
 筑前守の授け謀らうとあつるひ出し
 其邊の百姓共を呼出し老弱男女をいれり
 金銀錢帛とあつる其方共是を國に波多野あ
 りと知てあつる其方共の天子の民たること
 知らうとあつる當手の軍勢を案内とへ遠
 らは波多野を亡し其方ともと安樂とあつる得さ
 そべし所當の年貢と出さる土地の百姓の
 のたるべしと下知とらうとあつる

と一うの百姓等大小悦ひひて此大将又従ふ我
我安堵の基たるべしと古と厭ひ新と慕ふ
人情のさこののとも一揆を起し氷上の城下
押寄亂妨あるひ寄手又加らうて案内をこめと
いふののともあうけるめと秀長まわ悦ひ便宜
と得たうと同月十六日進て荻野城と取圍む城主
荻野彦六左衛門尉朝道随分力と竭し防と戦ひ
めとも寄手多勢あうて入替く息とも繼と攻立
ゆるめと城兵の防さうのく見つける処へ檢
使の堀久太郎秀政手勢と励まう一番ふ乗入たう
順慶法印是と見て堀を我身を檢使あるふらう軍

の次第と見物しつていさう一秀政とてふ乗入た
うとこれ某とてを後とへさるあうばそめめ
者共攻込や壯士ともとせり立く攻けは筒井ら
勢をこや城中へ乗入たう是等をらめと秀
長う手の者段々ふ責入しつら彦六左衛門尉朝道
今は是追あうと多勢の中へ切て入切立く戦ひし
とも寄手の多勢あう終らうあは討とさう首と
加藤孫六嘉明う手へ取たりけう同十九日久下の
城へあ寄る城主久下越前守無雙の勇士あうか
の寄手何程大勢あうとも恐と氣もあく居たりけ
ふ処へ美作守宗貞加勢とて入來あうしう久

下大ふ喜ひ羽柴勢雲霞の如く寄來り當國の城と
 元多く落し今に當城と氷上をうらにありた
 り然に我等運の末と見へ川も花々一軍
 て討死とやとおのふのさお打出一軍して敵
 味方の目を驚かし一とて五百餘騎面もあつ
 打て出散々を戦ひけし寄手大勢あとも先武者
 み切立りしと四度路よりとていあつふられさ
 柴勢の大勢あつし透間あつし揉合りし久下
 波多野三百餘騎は打あつし手を負ひのし数し
 びさへ城中へ引返り腹を切らんと馬を立直し城門
 と入けるを付入ふさんと責付しうとも久下引て返

防と戦ふその隙に宗貞主從自害して失し久下も同
 腹を切久下の城をてし落し寄手直し氷上あ
 寄使者と城中へ遣り降参を進めける主殿頭宗
 長より使者を請し入御口状の旨うしこゆり入て何様
 御陣頭へ参上仕さへく共若者既久下の城に於
 て自害して命をさしむも子孫のためは然に何
 のため降参して餘命を全くとてや使者立り
 此由秀長よりあへて懇懇に挨拶し城門の外へ送ら出
 しそのち心静に宗長自害しけし從卒思々腹切又
 差違へあしけし城に終ふ落て西丹波平均治ら
 うけり此時東丹波へ龜山口より惟任日向守光秀を

向ひらるる西丹波と秀吉よ仰付らまこと深く憤りしう
二刻も早く攻從へんと峠の城とてめ沓掛細野西
岡本目と短兵急よ攻おとす光秀本目の城よ入て波
多野右衛門大夫秀治う籠うたる八上城を圍とけ
ある城も城あり籠る処の兵士よ名譽の物のと
多げまの丹羽池田高山塩川中川の人と一手あ
うて板鳥山天王山丸山岡山等の城々と攻落し
めとも八上と赤井う城つとて落去とほその
うちよ西丹波らとく平均し五月下旬よ筑前守
の播州へ引返しけるよ光秀とてある面目を
失ふよ似たうとてとめて織田殿の御心の中と

怨とめしこと

丹波鹿集の城の鹿集式部少輔則重守津の城の
赤井刑部少輔直正出雲よ荻野悪右衛門尉幸家
八木よ内藤日向守餘戸よ福井某杵よ園田彦次
即馬路よ中川駿河守陰山よ陰山源太井上よ井
上出羽守高屋よ高屋市正關よ守津某篠山よ荒
木民部大輔草山よ草山將監あとありしと

重修真書太閤記五編卷二拾

重修真書太閤記五篇卷之廿一

波多野兄弟擒らるる事

并光秀遺恨の事

惟任日向守光秀東丹波の諸城と攻落しあり共波
 多野右衛門大夫秀治同遠江守秀尚等籠りしる
 八上の城強くして落城を光秀多勢を以て押寄
 数日あつと責しとも兎角寄手敗北と一なり西
 丹波既平均して羽柴勢播州へ引返せしと聞光
 秀大よ心と苦め我請取の丹波あり筑前よ先とせ
 られしと残念云らうりあり大殿の御機嫌もあり

あつて諸人の嘲哂も口惜し如何とんとおのひ
川せとも術計盡して但一日くと暮しけさの兵
を詭道あり然ハ波多野兄弟と欺て生捕らやと思
案一即使者と城中へ遣ら織田殿當國と平治を
られんとの本意土地を貪るよあり元より波多野
一門に遺恨あるよありを只朝廷へ奉公の忠を致
されいへと申事を同意せしめんり為りて候普天の下王
土よありさるいなる率土の濱王臣よありさるわ
あ一國を領し民の力と私して一度も參勤をせざ
國役を運上せしとさるものと各々何とて思案い
さひや西丹波の宗長宗貞自滅をらるることハ弓箭

の上のこよして是ハ織田殿の本意と了解い
とさる誤りと覺い御邊兄弟籠城して織田殿と國
と争ふとむし思これいふは只朝廷の勅定よそむ
めこの事何人りよと申へ其上よその城中よ
於て運を閉りせいんこと千一川もあるへり
空しく戦場の土とありあて永く波多野の名字
と斷絶せしめあふのこり屍の上よ勅定違犯の汚
名と受あふこと豈うありや光秀り申旨よ同
心ありて早々安土へ御參あるへ近き例を申さ
ら高山右近中川瀨兵衛等いつとも荒木一味とて
籠城いひし織田殿より使者とらげてとてめり

小陣頭へ参らまはしりて本領と安堵一即光秀と一緒
 に爰迄出勢のしりていふ然者御邊兄弟も神速
 小安土へ参らまはしりて朝廷の勅定も違ふと云をた
 しめ申述らまはしりて織田殿とて三三公の一負も
 して朝廷の大臣あり面々いひまはしりて朝命を奉じ王
 事も勤勞ありまはしりてたまはしりて申へり
 光秀も申述りしも相違あるへりいひて牛王寶
 印の裏へ誓詞を加えて差遣りしりて秀治秀尚
 此儀尤といひおのへりとも光秀も偽て云ふやと疑ひ
 どのひてまはしりて返辞もなかり光秀もまはしりて
 難つけ此程申入候事偽りと疑ひおのひりまはしりて

せえたり光秀更偽と申入といひ但一旦の疑念と
 散せんり為光秀も老母と人質も参らまはしりて
 やく國民の安穩ありん為と其家の相續ありまはしりて
 筋とあつたれ安土へ参られゆへ一當國の荒木山
 城守高屋筑後守いひつとも貴邊へ隨順せりいひのな
 るか王臣ありて王命と受と王土も任りて王事も
 従ふまはしりて天道も背さ人望も違ふ由と得道あり
 て光秀も申小従ひ織田殿も御禮申いひつとも本領
 新恩と以て安堵と一也是二人の申条と御聞ある
 へ更みくいつまはりていひつとも遣りけるまはしりて
 荒木高屋の兩人波多野といひ元より親しめける

あまう城中よ入種々と利害をとらさける上光秀の
老母と城中へ同道をうけし秀治秀尚兄弟終ふ
と信し六月二日八上の城を出本目の城中へ入
来りしうら光秀對面し神妙の事あひ急さ安土を
參向あるへとてあつ京都へ遣らるる近
江路へ出立をけり八上の城中よてい秀治秀尚本
目の城を立て京都へ出安土へ行向ひしと聞安土
の首尾を待くらしける処へ光秀使者來り兄弟
の衆今安土へ出立あひぬ本領安堵の御沙汰相
違あるへうらびさし光秀申處偽よていぬ
こへ城中の衆も得心しこれいへし因て光秀

河津お男
小太夫福
西三ノ
甲六車
世お車
中お女
のまお

う老母いつよて城中よこし置るへさや益あること
さめて候らぬ此方へ御返しありて然るべくい
と申入しうら波多野の一族并ふ家老中うちあり
評定しける様御兄弟の衆本目よて何とあく安
土よて行向られしとも相違なく聞え川をともい
まゝ織田殿より斯々と定りたる御説もなく御兄
弟の衆いまま歸城あけい請取し御兄弟衆の留
守の間お我々意とて大事の人質と返しおい
らびるし叶ひひまると返辞をいうらと道理なれ
ら光秀も辞あく然らぬ安土へ申入るるのめ謀
もあるへしとて使者と安土へ遣らし織田殿へ波

十お女

多野兄弟と擒りゆとめらうくいとてゆへを志す
ト死刑のこ猶豫あり給らうゆ様ふと言上を
羽柴筑前へ西丹波とらつり十餘日のうち斬平
け波多野父子も腹切を久下萩野とも打取し武
勇といひ智畧といひ抜群の働といふへ光秀り
如さへ偽を以て兄弟と叫り出の事弓箭の道ふ
らとく老母と質として偽とたをくること人情よそ
む希りその上秀治秀尚う進退のと思召もあるふ
猶豫をよとい何事とやとて織田殿以の外も怒ら
せぬいりうを惟任り使者面目と失ひ本目よりへ
り安土の次第と詳ふ述て大息つく光秀案ふ相違

斯てい老母と取りいごとくふふと心中燃
あつちのらくおゆひふとひ城中へ使者を立て兄
弟の衆安土へ參着あり一処織田殿歡樂ふよりゆ
していまの面會ありむとねと本領の沙汰ふ及を
せをいへとも不日は帰國あるべくゆりうてい光
秀り老母と出城ある様ふ計らひむふと申遣
らへけるよ城中よていこあもくくあを兄弟の衆
飯城あるまてき御老母と返しゆとあるまゆい
と嚴敷返答ありたりけまの光秀此度も老母を取
返そとめあらひ如何あさまと肺肝と挫さける
ふ城中へ何とて聞えけるま波多野兄弟安土

へ参向さんこうを了りに織田殿のさし圖ずとして安土あつちの慈恩じいん寺てらに押込おしこて對面たいめんとたよゆるを斯くての本領安堵ほんりやうあんたふのひもあつるに光秀ひかりひでの策さくよて織田殿の下知したちよて無なくあつた然しから我々われわれ運うんの未まと覺悟かくごを了りた光秀ひかりひでの偽いつはりよたつた秀尚ひでたかの虜らとなつた宋そうの徽宗きしゆ欽宗きんしゆの金きん小虜せうらに似にたると云て齒はむことふは光秀ひかりひでの使者しや者城中しやじゆうに至いたるともそのうち取合とりあひをも兎角うしやくをるうち秀治ひでたか秀尚ひでたか慈恩寺じいんてらよて切腹せきはらせし由聞よしきえしゆら光秀ひかりひで大おほに驚おどさる如何いかもせんこの事城中じじゆうに漏もれたる人ひとよの老母らうぼ定さだめて害あやに逢あつた江丹道えにたんどうつこ

たまを此事このことのまに城中じゆうじゆうあて知しらるる計けいあへしとて又詞またことばを設たてげ老母らうぼを迎むかへ取とりとあへけるよの川がはに城中じゆうじゆうよてことばを知し大おほに憤いらいり主人しゆじん兄弟あにがた誅ちゆうをらまし上うへの我等われら誰たれ為なる命いのちをたつたふとてそや只今ただいま切きて出いで死しる身みあり惡わるし光秀ひかりひでめら偽いつはりて主人しゆじん兄弟あにがたと安土あつちに送おくりしと武士ぶしの作法さくはよあつた人ひと非人ひいんの所業しよごふと云へし此質このちかとして送おくりし老母らうぼに罪つみらあけしとも光秀ひかりひでよそのあつ返かへし送おくらんも殘念ざんねんありとて矢倉やくらに上のぼり用もちあけし明智あけちか十郎じゆうらう左衛門さゑもん尉ゑいとさしよぬさあつて見てその方の主しゆの光秀ひかりひでよ達たつとつと様さまの波多野はたの殿の兄弟あにがたとも安土あつちよて切腹せきはらあ

りし由たりし事聞きたり本領安堵相違ありし何事
とひひつるそゆその時其方より送る人質今ハ
不用あり依て是を渡さんととるそをやく出て迎
えよと呼ぶるあやう光秀何とそ持てゆけと迎の
人を出し自身も立出とい老母と縛め逆まゝ矢
倉より下へ釣下太刀と抜てさげ切り切て落し嘯
と笑ふ光秀あまを見氣も魂も身もそをいこむ
情ありあむと安土よて今四五日猶豫あり給る
ち無事よ老母を取しそんりのを年來の忠功も
あれそを丹波の守護とも賜ひしあま其國おさ
めん術よあまのめくそとやとて光秀誤る

よあらし光秀り一左右と待せあま共おそりぬ
事あまに波多野兄弟と誅をらとてこの早さる故
よ我老母あまの非業の死とる然い却て我母
とろろとののい波多野り家人あれとも我母を殺
さしむるを織田殿より織田殿こそ我母の仇あま
とあて怒りしうのともその詮なれいあまの老母
の死骸と取入させそのち短兵急よ攻立しりら
惣軍一度よ押寄息とも續をい堀と埋堀と破り乗
入けるあまとよ大手と何るく攻破り寄手城中へ
攻入しりい城中よても兼て期したる事といひ今
そ何まて命を惜まんと引組く指違く戦ひ一人

も残らば討とせり光秀あまの憤らしこは城中
ふある處の犬猫やてもをへく生あるわのこくく
志とを殺してこそこの腹を居たけり抑この老
母といふい光秀の實母ふいあはれ叔父の明智兵
庫助光安へ道宗宿か妻よして左馬助光治り實母
あつこもとも光秀か幼稚の時より養育をられ
恩厚けと哀むこの深くその上左馬助り心
中と察し歎このあまの安土ふ今もこの也
光秀のあれやと申請つるゆのと猶豫ありむるぬ
この悔しさと吐息つとけり織田殿とらうとけ
る光秀り心の内こそあろらたよき

一書よ光秀の丹波國東田郡宇津八村の内明石
村の人よてとめ明石十兵衛といふ父の頼充
祖父の兵部少輔頼興といふ土岐九郎頼基十二
代の孫ありとをらめ細川藤孝ふ仕八十石を
領をう地方ありけと引替賜ういと請申
をよ藤孝の臣米田監物入道宗鑑聞入さう
るとよ細川と立退信長よ仕らめい普請奉行
たうし後登庸忠興と塔とをといへり然
まとも光秀の享禄元年戊子歳よ生る藤孝の天
文三年甲午ふ生と織田殿と同年あり藤孝の
め山城國長岡ふ任し稻屋妻豊後守下津權内岩

成主税助萩田龜之助小泉某賜田某とてゆめふ七
人衆と云とゆへり永禄八年室町亂の時義昭と
共に出奔し十一年義昭の爲し信長に使し信長
に説て義昭と京に飯し入義昭植島に遜とむひ
のち元龜四年七月十日藤孝長岡の地と安堵し
初て織田家臣とす然し光秀の織田家仕
ふるも永禄十一年ふして然も越前より來ると
いふ然し其長岡仕ふと云ひ光秀嵯峨に任を
し頃や

丹州赤井家由來の事

并刑部景忠雌雄の猛獸と捕ふる事

光秀既し波多野秀治兄弟と欺て安土に往しめあ
しと殺し八上の城と屠り丹州大形平均とるとい
えとも波多野の縁者赤井悪右衛門尉景遠といふ
大力無雙の名士たり一人惟任に從ち光秀あれ
と攻へしとて六月十六日赤井を籠りたる奥丹波
鬼ヶ城へ押攻一時責し責落さんとゆふとて
も城中をめぐりも弱る氣色あり寄手多く討ち勿々
急し落城とてへくも見えさしと光秀案を相違し此城
所詮一旦しん落すしと炎暑の時節ていありま
川此より捨置冷風立て攻へしとて軍勢を引揚
八月下旬ふして赤井を攻めしとて龜山の城を打

出ける折しも播州の羽柴筑前守の許より脇坂甚
 内安治と大将とて五百餘人の加勢と差越たり
 ちとへ此頃悪右衛門尉病に侵され起居安うらぬ
 うと秀吉の斥候の者聞出しとてあそ光秀の許
 へうくへ通せしむる光秀とあそち軍勢と催促し
 鯨波と川くわ鉄炮と打ちけ嚴敷攻立ととも城中
 防禦の手當行届と寄手手負の多けととも城中
 さして傷つてくめのもあし脇坂此体と見て光秀は
 向ひ城の大將景遠病中あれども家人士卒追命と
 をしゆまごめくころう能働くと日頃赤井の士と養
 ふと衆は勝とて故あるア加様よてい勿々たや

ごとく落城とてまうしとあり然に攻口と遠き城由
 へ使者と立ちと開城和談の義と申遣とされたる
 人の如何と申けるまう光秀尤と同意し軍勢と
 五六町とめり引退て陣とらうとて城中へ使者よ
 誰と遣らひへとと評定あしけるま何も顔見
 合と某ゆらんと言者もあし脇坂進と出行へ人
 の無らんまち安治ゆくへとと望けるまあう
 光秀も然いとて同心は柳この赤井は波多野秀治
 の妹婿とて丹州数代の國人あり其先祖と尋ねる
 よ清和天皇五代の孫掃部助頼季の後亂ありこれ
 とそ井上源氏と号してその枝葉丹州に散在あり

賴季七代の苗裔赤井藤太景廣舎弟小黒井次郎景次
次兩人共ニ九郎大夫判官義經ニ從ひけるり一谷
の戦ニ景廣平家の陣へ忍び入能登守教経の手ニ
て討死せり。判官の事とあれを鎌倉へ注
進あり。頼朝卿も景廣の忠死と感し思
召その子孫を能取立ひ。と下知せり。頼朝の景次
判官頼朝の氣ニ違ひむせり。奥州へ下りて
山伏姿ニ出立。景次安宅の關ニて判官の身ニ
代り討せり。頼朝聞食主の命ニ代り。不便
ふ。とも義經の郎等あり。恩賞沙汰ニ及られ。景
廣の頼朝が為一谷ニて死したるを其賞行せり。

景廣の幼子小丹波船井郡と賜らる。國人の
隨一とめ。赤井太郎景近是也。それより八代
と經。元弘年中赤井荒次郎景忠と聞え。一萬夫
不當の勇士あり。足利尊氏當國篠村ニ着陣あり。て
義兵と挙げ。時景忠真先ニ馳加。六波羅
攻。處處ニ勲功を立。所領の地あり。加え。景
丹州三郡の地頭と賜らる。赤井刑部少輔と稱。一日景忠家
人等と具。大江山狩。ける。その日殊ニ獲物多。一
て人々興。入ける。ある岩窟。見。獸飛出。一
其色黒。首。尾。長五尺もある。四足赤松
の枝の如く毛色鼯に似。何と名を知。の。木

根岩石の嫌ひあり走廻ける体真におそろしく見たりけるを景忠
 して射留てられんと大の中差取てあれを射るふ胸中ふあこり
 て飛返る二矢と番て同一矢つねと射てけるは是もあつて
 こつて家人共ハ鏃の立ぬ奇代の獣ありと怖あつて景忠
 こつても恐とて勢子の中へ入て手取よせんと構てられ彼獣
 ありつて追まはされ遁と出と道なく景忠と目よりけ飛
 びとて景忠とこつて抱と留力よせとて捨付けし
 さしもの猛獸ありとも大力よめ付らと少しとこつて働
 こ尋と景忠得とと腰刀と抜て胸のあつて突けるふ少し血
 の出げとつて幾刀とあつて透と終とこれと止家人等
 ふあつて縄と付て引んととつ時や同 様ある獸一足と出

先殺さる獸と慕とつて聲と発と鳴とてむ体ありと景忠
 のふ様是は先捕たる獸の雌ありと此ととも遜とさふあつて例のう
 と矢打つひ丁と射とあつて首筋よとて立急あつてたつ
 えの倒る処とつて寄とつて突止是と今日の手柄とつて狩場
 の遊いへて止まげ然と其夜景忠の枕とつてつての獸ありと出
 是大江山と数百年の壽と経と一豹也然と今日雌雄共御身よ害とら
 とつて命数の盡と期ありと怨と共ありと但雌雄の首と二堆の塚
 とつて皮と止めて子孫の寶とつて御身よ武勇と守とつてつと
 うとあつては一場の夢とつてけり景忠奇異のありと城の乾の
 隅と二川の首と藏とて是と祀と其皮と貯置とつて四足
 も落油もぬけ細るつと四尺あつてもあつて革袋の縫めあり

物ありしは調寶の物也とて太刀刀の類と納り置けり其の武運次第
み鍛系昌しけるなり

乙葉三郎頼季信濃國高井郡井上卿に任じけり井上三郎共云其子孫家光
丹波國に任じ是丹波井上の祖也家光の五男道家丹波國の大毅なり道家の
子忠家輩申郎と云其子家範其子朝家其子為家父譲り受て丹波半
國の大毅なり初て氷上城に任じ赤井九郎と稱し其子忠茂其子基家尊
氏卿に從ひ多る良濱とて勲功ありしは二引西の旗賜けり云景廣
景次の事系圖に見へ頼季七代朝家其弟家貞其弟秀家其弟明
範其弟氏家と有又景忠といふ名もとて貂栗鼠二類二物あり
と云共貂は太栗鼠は小也一物ありと貝原篤信の説あり

重修真書太閤記五編卷之廿一終

